

震災で知った「ご近所の温かさ」

イーストウエスト日本語学校 副校長 嶋田和子さん（中野区中央）

地震発生時、イーストウエスト日本語学校は授業の真っ最中でした。留学生達は、速やかに近くの公園に避難し、やがて仲間同士で助け合いながら帰宅の途に着きました。残るは、数日前に来日したばかりの高校生クラスの11名。ホームステイ先は遠く、電車を乗り継いで行かなければなりません。そこで、町会のご厚意で、本来宿泊は認められていない宮二町会集会所に特別泊めていただくことになりました。とはいえ、布団セットを手に入れることもできず、たくさんの座布団を敷き詰め、コートを羽織っての雑魚寝でした。



ところが、翌朝集会所に行ってびっくり！高校生たちは毛布くるまって暖かそうに寝ているではありませんか。傍には、朝ご飯にと、ご近所の方が下さったたくさんのお握りとお茶がありました。

その5日後、両親からの帰国命令で全員タイや韓国に帰って行ってしまいました。しかし、日本人の温かい気持ちに触れた高校生達は、国に帰るやいなや家族を説得し始め、なんとその半月後にまた日本に戻ってきたのです。「先生、日本は良い国ですね！私、大好きです。みんな親切です」という声とともに……。こんなすてきな「草の根外交」は、きっと若い彼等の心にいつまでも残っていることでしょう。

この震災を風化させないために

行政書士 入江潤一さん（中野区中野）

未体験の激しい揺れに恐怖した3月11日から3ヶ月。今、私が強く思っていることは、「この震災を決して風化させてはいけない」ということです。中には、すでに震災が過去のものとなりつつある人もいると思います。当然、それを責めることはできません。

震災直後は、その甚大な被害に日本中が震撼し、「何か自分にできること」を模索しながら、被災地支援の声を上げていました。今思えば、少々加熱し過ぎたようにも感じます。義務感に苛まれて行った義捐金の寄付や、相次ぐイベントの自粛中止など



も、直接被害に遭っていない人たちの支援意欲を削ぐ結果になったようです。しかし、被災地では、現在もなお多くの被災者が避難所での生活や、物資が不足した厳しい環境での暮らしを余儀なくされています。また、改めて言うまでもなく、この震災被害の復興には気が遠くなるほどの時間が掛かるのですから、こんな数ヵ月間で支援の声が小さくなってしまってはいけないです。「この現実」を風化させないために、自分たちができる事を、どんな小さな事でも構わないので、継続的に実行していくたいと思っています。